ミキモト真珠島 その軌跡

御木本幸吉の手によって養殖真珠が誕生し、今年で１１８年。
その養殖真珠誕生の地・ミキモト真珠島が今年３月、一般開島60周年を迎えました。
〈写真・文　ミキモト真珠島提供〉

昭和30年頃のミキモト真珠島

御木本幸吉

【世界初！養殖真珠の誕生】

安政５（１８５８）年、鳥羽のうどん屋「阿波幸（あわこう）」の長男として生まれた幸吉は、幼い頃より家業を手伝うかたわら青物や海産物を商っていました。

商人として様々な経験を積み、二十歳になるのを機に家督を継ぐことになった幸吉は、開国間もない東京・横浜の視察旅行に出ました。この旅で幸吉は真珠との運命的な出会いを果たします。

横浜で立ち寄った外国人商館で、ケシ粒ほどの伊勢志摩産真珠が驚くほどの高値で取引されているのを目の当たりにし、いつしか真珠を商うことを夢見るようになったのです。夢の実現に向けて一層商売に打ち込んだ幸吉は、周囲の信用を得て念願の真珠仲買人となることができました。

しかしその頃、天然真珠採取を目的とした濫獲が進み、伊勢志摩のアコヤ貝は絶滅寸前でした。「このままでは、アコヤ貝がいなくなってしまう。」と考えた幸吉は、アコヤ貝の増殖に着手します。そのとき力を貸してくれたのが、津市出身の大日本水産会幹事長・柳楢悦（やなぎならよし）氏です。柳氏のお陰で海の使用を許可された幸吉は、海底に打った杭に縄をはり、そこに結わえた瓦や木片に稚貝を付着させるというアイディアを実践します。

実験開始から約３か月、稚貝が付着しているのが確認され、実験は成功。その後もアコヤ貝の数は順調に増えていきました。貝が増えれば採れる真珠もそれに比例すると考えていた幸吉でしたが、期待していたほど多くの真珠は得られませんでした。

そんな時、柳氏から「動物学の権威で真珠研究の第一人者でもある東京帝国大学教授・箕作佳吉（みつくりかきち）理学博士に紹介したい」という手紙が届きました。幸吉は早速博士の研究所を訪ね、天然の真珠が生まれるプロセスを学びます。それは、「なんらかのきっかけで貝の中に異物が入り込み、それが吐き出されずに長い時間貝の体内に留まれば、その異物を包むようにして真珠質が形成され真珠になる。」というものでした。しかも、「誰も成功したことはないが、理論上は人の手によってできるはずだ。」というのです。その言葉は、幸吉の心に火をつけました。「誰も成し遂げたことのない仕事こそ、やってみる価値がある。なんとしても自分の手で真珠をつくってみせる。」と決意を固めたのでした。

東京から戻った幸吉は早速、英虞湾で真珠養殖の実験に取り掛かります。ガラス玉や陶器のかけらなど、思いつく限りいろいろなものを貝に入れ、数か月後に開いてみるという作業を何度も繰り返して行いました。しかし、たいていは吐き出されてしまい、まれに貝の体内に残っていても真珠はできていませんでした。

何の成果もなく時間だけが過ぎ、資金繰りにも苦しむ幸吉の様子をみて、周囲の人々は「悪い男ではないが、真珠

大正時代の頃の相島

なんぞに取り付かれてしまって…。気の毒に。」などと陰口を言うようになりました。

そんな周りの冷たい視線にも負けずに実験を続ける幸吉を、最大の試練が襲います。大規模な〝赤潮〟が発生し、英虞湾の貝五千個が全滅してしまったのです。

「もうだめだ、諦めよう…」そう思い始めていた幸吉をもう一度立ち上がらせたのは、彼を支え続けた最愛の妻・うめの一言でした。

「まだ、相島の貝が残っています。」

用心深い幸吉は何かあった時のためにと、鳥羽の相島でも千個程の貝を育てていました。幸吉は被害を免れたわずかな貝で、最後のチャンスに懸けることにしました。

そして実験開始から3年余り経った明治26（1893）年7月11日、運命の時が訪れます。

その日もうめと一緒に数か月前に異物を入れた貝を引き上げ、真珠ができているかどうか確認していました。すると突然、「あ、あなたっ!!」と叫ぶうめの声が静寂を破ります。慌てて駆け寄った幸吉にうめが一つの貝を差し出しました。その貝の内側には、確かに幸吉の手で入れられた異物を包むようにして半円形の真珠ができていたのです。

それは、これまで世界の誰も成功することがなかった養殖真珠誕生の瞬間でした。その後も多くの人の協力を得ながら努力を重ね、幸吉が人生のすべてをかけて完成させた養殖真珠は世界中の女性を輝かせていきました。

澁澤栄一氏（左）と御木本幸吉（右）

【養殖真珠誕生の地・ミキモト真珠島】

真珠事業が日本を代表する産業に成長する中で、幸吉は政財界の重鎮との親交を深めていきました。中でも、「日本資本主義の父」と呼ばれた澁澤栄一翁には多大な影響を受け、翁が提唱する「民間外交」にも力を注ぎました。

その最大のプロジェクトこそが、養殖真珠が世界で初めて生まれた場所〝相島〟の整備だったのです。この計画が幸吉の口から初めて発せられたのは、明治30年の大隈重信候との会談中でした。

「外国には水晶宮なるものがあると聞きます。私は真珠宮をつくり、海女が真珠貝を採取する様子をはじめ、真珠養殖のすべてが一目瞭然にわかる仕掛けを施したいと考えています。」と時の大政治家を前に語ったのです。

それから約30年後の大正15年、1年近くにわたる欧米視察に出た幸吉は、民間レベルにおける諸外国との交流の重要性をあらためて痛感し、帰国するやいなや相島の整備に取り掛かるのでした。そして昭和4年島内整備が完了し、幸吉自ら「真珠ヶ島」と命名。養殖真珠誕生の地の公開はすぐに評判となり、各国の王族をはじめ、政治家、大公使など、来日したほとんどの外国人が訪れたといわれています。

英国王室エリザベス女王とエディンバラ公フィリップ殿下（1975年）

ところが、昭和18年には第二次世界大戦激化により、島を軍部へ提供することになります。終戦後の島は荒れ果て、とうていお客様をお迎えすることなどできない状態になっていました。

そこで昭和25年3月、幸吉は真珠ヶ島の再整備に着手。同年5月25日、アメリカ第8軍司令官のウォーカー中将夫妻を迎えて開島式が催されました。

開島したとはいえ、この頃はまだ連合軍関係者しか入場できず、観光客向けの施設ではありませんでした。しかし、戦後の混乱も収束に向かい、日本人も行楽に出掛けるゆとりが生まれ始めると、各方面から真珠ヶ島の一般開放を望む声が寄せられ、とりわけ学校関係者から「日本の将来を担う子供たちにぜひ真珠ヶ島を見せてほしい。」との強い要望があり、幸吉は広く開放することを決断したのです。

そして昭和26（1951）年3月12日に一般開島し、「観光・産業・教育」を三位一体とした世界的にも類を見ない観光施設、ミキモト真珠島の新しい歴史が始まったのでした。

それから60年、島内施設の充実を重ね、今もなお国際観光文化都市・鳥羽を訪れる多くのかたに「海の宝石・真珠」の故郷として愛され続けています。

現在のミキモト真珠島